



「家庭の日」 作文集から

毎月第三日曜日は「家庭の日」。市教育委員会と市青少年問題協議会は、明るく、楽しい家庭づくり推進運動の一つとして、市内の小学生から、家庭の日にちなんだ作文を募集しました。その作文集の中から、毎月一つづつ作品を紹介していく予定です。子供たちの作文を読んで、家族との話し合い、共同作業、レクリエーションなどが、子供たちにとってどんなに楽しく、うれしいものかおわかりいただけると思います。

子供たちにとって、テレビは生活の一部といってもよいほどで、ほうっておくとも何時間でも見ています。ちよつとやそつとでは離れられないような魅力がテレビにはあるようです。

そこで、毎日の生活の中で何時間、どのような番組を見させ、子供の成長にプラスさせていくかが、お母さんにとって大切なテーマになります。

まず、視聴時間——つまり一日にどのくらいの時間をテレビにあてるのが適当かということですが、これはいちがいにはいい問題です。

年齢や家庭環境、生活のパターンなどによって違ってくるが、仮に時間を決めるときは、子供との納得で、しかもお母さんとの「約束」という形にするのが一つのやり方です。

テレビ

自分でコントロールできる自主性を育てよう

また、「時間制」ではなく、見る番組をいくつか決めておくのもいいでしょう。いづれにしても、ダラダラといつまでもテレビにしがみつ

ているのではなく、テレビ視聴を自分でコントロールできる自主性が育つように気を配りたいものです。さて、番組の選定ですが、子供には子供の世界と生活があり

ますので、一方的に「マンガはダメ」とか「活劇はよくない」といった、おとなの尺度を押しつけるのは感心できません。おとなの目には、くだらない

番組と映っても、子供にとっては、はげましになったり、がまんすることを覚えたり、情感を豊かにする内容のものもあります。

また、番組の一部に感心できない点があったときには、子供がそのままのみにしないように話し合う機会を持ちましょう。そうすることで、母と子の会話のチャンネルが、また一つ増えることにもなります。

いつか、母がこんなことを言っていた。「今日は、家庭の日なので、パーマやさんは休みなんたて。」
と言って、早く帰ってきたのを思い出した。その日は、第三日曜日で、仕事の休みを利用して出かけた母が、パーマをかけるれないで、がっかりして帰ってきたのだ。その時、「家庭の日」という言葉を聞いて、私は、「ふーん」とだけで、何も気にすることはない。

それから数か月がたち、あらためて「第三日曜日は家庭の日」だと知った時、私の家では、何もしてないし、家族からもそれらしい話も、行事も、もったことはない。
ごくあたり前の生活しかしていない私の家を、父や母を「家はけちなんだから。休みだつてごへも連れて行ってくれないんだから。」と、うらんでばかりいた。
そして、ものにあたりちらして、困らせてきた。

「家庭の日」

野口小六年 上野佳代子

(現在東中一年)

を上げ、粉やバターやお砂糖など、いろいろな材料を使い、レンジで何か作っていた。「お母さん、何作っているの?」
と聞く。
「今日は、時間が少しあまったので、ケーキをやっているんだよ」と言った。私は、

「誰かお客さんでも来るの。」と聞く。

「夜になってから、かわいいお客さんが来るの。だからその人のために作っているのさ。」
私は、またブンブンおこつてしまい、自分の部屋に入って、あみ物をしていた。その時「佳代ちゃん、ちよつと来て。」と母が呼ぶので、茶の間へ行ってみると、ケーキやくだものや、いなりずしなどが並べられ、すっかりお客さんを迎える用意ができていた。

「お客さんは、何時ごろ来るの。」と聞く。

「今、お客さんが来たわ。今日は、家庭の日でしょう。だから、お母さんのお手製のこちそうで、話し合いますよ。」
私は、びっくりしてしまいました。そしてその夜は、いつまでも話しが続き、物やお金にかえられない、すばらしい家庭の日でした。